

# ラインの向こう側

## ～ 留置所体験記 その6 ～

茶ーリトル(ペンネーム)

### 前回のあらすじ

友達2人と服を盗み逮捕された。僕は20歳で、あとは未成年。僕だけ違う場所に連れて行かれ、留置場生活が始まった。

手錠にひもを通され、一緒に捕まったあきらとも合流し、僕たちはワゴンバスに乗っけられて警察の留置場を出発し、東京地検へ。そしていよいよ僕の番が来た・・・。

検事さんが僕に聴いた事って、結局この日は、事件の概要だけだった。実は、この日の概要次第で釈放か拘留かがほぼ決まるんだよ。ただ決定するのは裁判官さん。つまり、こういう事さ。「取り調べ期間が必要だ」って検事さんが判断した場合、10日間の拘留を裁判所に申請するのさ。そこで、裁判官さんがこれを承認した場合、10日間の拘留が決定するって訳さ。

検事さんが拘留申請した場合は、後日、裁判所に行かなきゃいけないんだ。そこで、その日は裁判官さんとさしで話しをする。といっても検事さんの時同様、事件概要の確認質問のみだけみたい。

ものの4, 5分で検事さんの話は終って、僕はまたもといいた檻に逆戻り。トントン拍子。そして、座ってじっとしていると、やって来るのはやっぱりあの「漠然とした恐怖」だ！ だから、僕は寝た。ただもうひたすらに寝た。がむしゃらに寝た。

でもね、この時分かったんだよ。結局目をつぶったって、不安なもんは不安なんだ。

眠り、なんていったて、それは僕の生きて生きている時の中に含まれているもの。

さっき僕は、眠りは恐怖から避ける唯一の方法、なんて言ったけど、そんなのは所詮まやかしているだけなんだ。必死だった。とにかく、目の前に横たわっている現実から逃げたかった、目を背けたかった、少しでも楽になりたいかった。

長イスはいつまでも硬く、冷たかった。

帰還のときがきた。順々に支部の名前が呼ばれ、やがて我が支部も撤収。地上に戻り再びワゴンバスへ。ここでまたあきらと再会。実は、地検についてからはまた別々の檻だったんだ。ただ帰り先は一緒だからまた同じバスへ。

正直、やっぱりホッとしちゃうね。こっちも笑っちゃうし、向こうも笑ってた。きっと、この時のあきらの笑顔は世界一だったね。ぼくを安心させる世界一！

帰り路、僕ら二人は、会話ができないから二人して窓の外をボ～ッと見てた。天気の良い夕暮れ時の東京。轟落に横たわっていた帰り道。でね、それがなんだか行きの時とは異質な感じだったんだよ。寂しさを感じさせた行きの景色とは対照に、帰りのそれは、僕の心の中になんとか暖かい風を吹き込んできたんだ。頭の中では、いつか聴いた様な綺麗な旋律が流れてきた。オレンジ色のオーケストラ。なんだか久しぶりに癒された気がしたよ。

警察署に到着すると、すぐに僕のところへ本日の結果報告がきた。つまり、拘留か釈放か。

### 10日拘留。

そりゃそうだな。一日で釈放なんて人はほとんどいないみたいだし、なんとなく自分でも分かっていたから腹を決めてはいた。でもね、やっぱりね、なんだかずっしりくるモノがあったよ。「自

分で蒔いた種だ、しっかり受け止める」、頭の中で誰かが言う。

五感で感じとって認識する動くリアル、真実。今日は雨、おじいちゃんが死んだ、いい匂い、誰かの声、熱いやかんは熱い……、リアル。そして、自分自身でも時に制御不能な生きるリアル、フィーリング。君のことが大好きだ、ぶっ殺してやる、もう嫌だ、あー眠い、やったぞ、超うれしい……、リアル。前者は後者を無視できるけど、後者は前者を無視する事はできないんだ。前者は時に、激流の川にもなるし、真っ赤にもえる炎にもなる。そして、生ぬるい水にもなるし、快樂な空間にもなる。その全ては、目には見えないホースを辿って、ぼくの後者へとやって来る。打破するのか？

僕はバッター、僕はガンマン。僕は、うつのか？ いいや、しない。でも、なんだか「認めて償う」って感じじゃないんだ。頭に浮かぶ、大切な人達の顔、非現実的かもしれないけど、その人達のおかげで僕は10日拘留を真から受け止められた。

(つづく……)